

経営には技術的側面のみならず、人間的側面も問われる

夢・ビジョンそして志

企業化に必要なのは、さまざま技術的側面だけではない。人間的側面が問われつづける。企業を支えるのは人間がつくる組織であり、その推進は人間によってなされるからである。前月号に書いたマネジメントもコントロールも、その下部構造の基礎的土台に組織の人間の側面が確立していなければ、企業化の過程で組織は崩壊してしまふ。

経営は技術であり、その方法論として、マネジメントやコントロールが必要であると主張すると、人間の無視だとか否定だとかいう誤解が生じるのも、基礎的土台である組織の人間の側面についての正確な理解が欠如しているからである。

組織構築の下部構造、基礎的人間的側面を確立するキーワードは、夢・ビジョンそして志である。

夢とは、広辞苑によると「睡眠中にもつ非現実的な錯覚又は幻覚。

また覚醒中に起る同様な状態。」つづけて、「ぼんやりしたさま、はかないさま、頼みがたいさまなどという語。夢幻」とある。

ウェブスターの英英辞典にはドリームの項に、日本の広辞苑にはないつぎのような二つの意味がつけ加わっている。

「好ましさの点で著しいもの。

あこがれの目標 (IDEAL) 《理想》」

ここでの夢という単語は、広辞苑の生理学的な解釈ではなく、ウェブスター英英のあとの二項目の意味である。

要するにばく然としたあこがれとしての夢が必要なのである。最も好ましいものとして、普段の生活の中で意中をあらさまに表白しにくい欲望もその中には含まれる。

特に創業者オーナー・トップの夢は超人的悪魔的な金銭に対する欲望から事業が出発する場合が多

い。食うに困って何とかして売れなくては生活が成り立っていかないから、絶望の断崖の淵に立って人とは違ったやり方に踏み切る。それが成功したという場合も含めて、痛切な金銭的欲望の充足へのあこがれがある。

あこがれでも、もちろん崇高な理想へのあこがれから出発する場合もあるだろう。この場合も、後日成功する創業者トップは、その「あこがれ」が、超人的な一種の狂気性を帯びたものであることが多い。

ばく然とはしていても、創業時まだ組織のソの字もできていないうちから創業者の心の中には、狂気性を持った熱気が必要なのである。それをここでは夢という。それは、天空に青い花を追い求める少女的ロマンチズムではない。もっと荒々しいものである。

ひとりで夢見る夢は、ビジネスにはならない。狂気性を持った熱気の原動力になってもそれは、はかなく消えてしまいかもしれない。

必要なのは、具体的な像である。ビジネスでは、その具体像は数字で表現できなくてはならない。例えば、x年後に店舗数1000店、

売上高120億円、経常利益高15億円等である。それをビジョンという。

ビジョンは、明確な数字表現を伴う企業の姿である。それは、目標とも違う。実現可能性の確実さよりも、可能性の多い数字である。実現可能性の高いものならビジョンにしなくてもよい。ビジョンは大きければ大きいほど力になる。

そのビジョンを実現化するため熱気の持続と拡大に必要なのが志(こころざし)である。志とは、目的に向かつてあるやり方で行動しようとする決意に対する熱気である。しかもその目的は、創業者の個人的欲望の夢とは全く異質の、人間社会に何らかの貢献をするものである。そこで初めて組織を構成する人間の意志統一ができる。

ビジョンと志との組織的な共同化が行動と方法論の共通化・慣習化を可能とし企業文化となる。